



地球大学アドバンス 第23回 [2009年度:第7回]

日本の「食」をどうするか?——「地球食」のデザイン、日本食の可能性

2009.10.19mon

わずか半世紀前には80%近くあった日本の食糧自給率は、東京オリンピック以降の高度成長に反比例して急降下。なかでも小麦・大豆・トウモロコシなどコメ以外の主要作物は1割以下の自給率で、エネルギー同様、私たちは暮らしの根幹に大きな脆弱性を抱えています。石油や化学肥料に過度に依存した現代農業そのものの構造的な危うさも、無視できないリスクでしょう。食の安全保障は量的な次元のみならず、「質」の面においても脅かされています。食の安全神話は、毒入り餃子などのあからさまな問題だけでなく、食生活全体のファストフード化や「種」「菌」レベルでの工業的な画一化など、もっと見えにくい次元においても脅かされています。そもそも人を良くすると書く「食」が、人の心身の健康を蝕み、人間のサステナビリティを脅かす要因となっている現代——。私たちは何をどこでどのように育て、どのように食べるのか?といった「食」のプロセス全体を再構築する必要に迫られています。

そして、これらはもとより地球全体の問題でもあります。20世紀の人口爆発を何とか支えてきた「緑の革命」も頭打ちになる一方で、気候変動や水不足などのリスク要因も高まり、世界的な食糧危機が現実味を帯びてきています。そうした変動への耐性を担保するはずの「生物・文化多様性」も、ファストフードや遺伝子組換え作物の急増などにより世界中で衰退の一途をたどっています。

いま私たちは宇宙船地球号の食と農をどうデザインするか?環境と人間のサステナビリティをどう担保しうるのか?という大きな課題に直面しており、そのなかで「日本食」をはじめ世界の伝統食・伝統文化も新たな視点で見直されはじめています。今回はイタリア・スローフード運動の研究者であり、最近では特に「日本のスローフード」の可能性に眼を向けておられる島村菜津さん、そして日本の有機農業の牽引者「大地を守る会」のオピニオンリーダーとして日本の農村の現状にも詳しい戎谷徹也さんをゲストに迎え、こうした問題を縦横に語ってみたいと思います。

[topics]

- 宇宙船地球号の食と農～地球の担保と不可視のリスク
- 「スローフード運動」の本当の意味
- 日本のスローフード再発見
- 日本農業の再生、自給率向上にむけて今なにが必要か?
- 地産地消と新たな都市 —— 農村連携の可能性

開催概要

日時:2009年10月19日(月) 18:30~21:30

ゲスト:島村菜津氏(ノンフィクション作家)

戎谷徹也氏(NGO大地を守る会 理事)

株式会社大地を守る会 農産グループ長)

企画・司会:竹村 真一氏 Earth Literacy Program 代表

エコツェリア・コンテンツプロデューサー

会場:新丸ビル10階「エコツェリア」

地図:<http://ecozeria.jp/access.html>

定員:50名(定員になり次第締め切りとさせていただきます)

参加方法:事前登録が必要です 事前登録URL <http://www.ecozeria.jp/earth/>

参加費:エコツェリア会員企業に所属の方:無料

*名刺にて照会いたします。名刺(社員証)を必ずご持参下さい。

エコツェリア会員企業非所属の方:有料2,000円

*新型インフルエンザの発生状況により、急遽イベントを中止することがございます。状況に応じて、参加申し込みの方には、お知らせいたします。

プログラム 18:00 受付開始 / 18:30 開演 / 20:30 懇親会 / 21:30 閉会